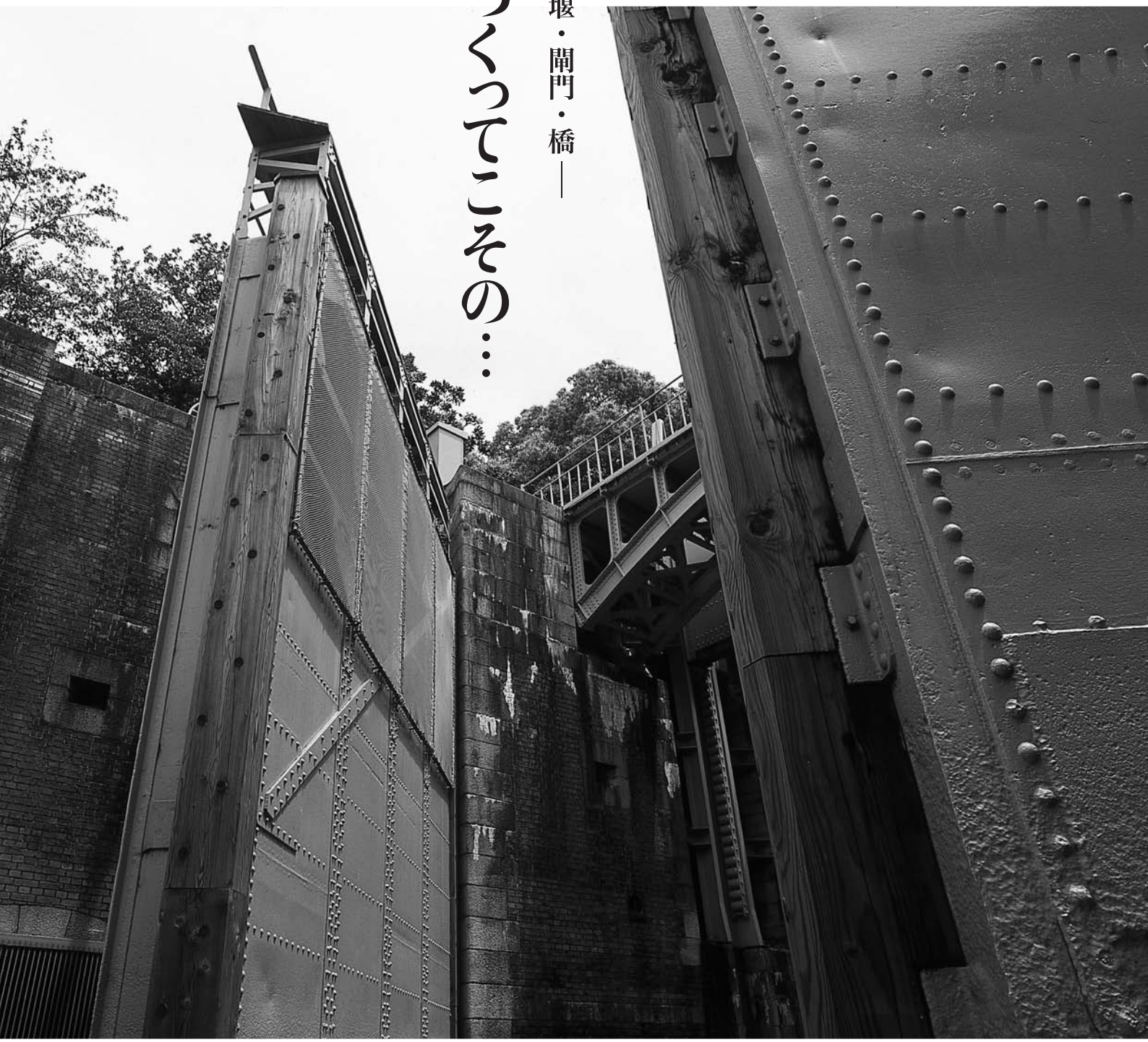
■水都・大阪を彩った洗堰・閘門・橋―

川は景色をつくってこその…

写真・文　下村 純一

下村 純一（しもむら・じゅんいち）
写真家、早稲田大学・武蔵野美術大学講師。1952年東京生まれ。早稲田大学第一文学部で美術史を学んだ後、フリーの写真家となり、ヨーロッパの近代建築の取材、評論活動などをはじめる。主な著書は、『織りなされた壁』（グラフィック社）、『不思議な建築』（講談社現代新書）、『アール・ヌーヴォーの邸宅』（小学館）、『銭湯からガウディまで』（クレオ）、『感性のモダニズム』（学芸出版社）など。



旧毛馬第一閘門上流側の制水扉

旧閘門の制水扉の基底部、全体はレンガと重厚な鉄扉による構造

■ 旧毛馬閘門（けまこうもん）
大阪市北区にある、淀川と旧淀川（大川）を隔てる毛馬水門は、新淀川開削を含む淀川改修工事に伴い1907年（明治40）8月に完成。川水を制する「洗堰（せんぜき）」のほか、船舶通過のために水位を調整する「閘門（こうもん）」がつくられた。
約60年後の1968年（昭和43）、新しい水門の完成で旧施設はその役目を終えた。現在、旧閘門などは公園として保存されており、2008年に国の重要文化財となった。

新大阪駅からタクシーに乗り込んだ。「今は使われていない施設ですが、毛馬（けま）の洗堰（せんぜき）と閘門（こうもん）まで」と言うと、ドライバーは一瞬戸惑う感じだった。あわてて本を取りだして説明を加えた。「それやったら、あの辺りかな。確か何かありましたわ、ほな」とマイナス気分なやり取りがあったものの、目指す毛馬の閘門には、ものの15分足らずで着いた。

都市の近代化の礎を築いた土木建造物を取材するのは、初めてである。土木では、難しい漢字が、まま使われる。洗堰は取水用の施設、閘門は運河の水位を調整し、船を導き入れる扉のことだという。はじめは読み方もわからない言葉だった。明治の先人たちが、次々に渡来する西洋技術に対して訳語として当てたゆえの難解な熟語の多さだろう。

そんな未知との遭遇への不安感は、保存された運河を目にしたとたん吹き飛んだ。重厚、堅牢、長大。土木建造物を形容するふつうの言葉だけでなく、所によっては柔らかみや優しさという言葉が浮かぶつくりだ。新淀川を開削しつつ、街の動脈である旧淀川（大川）の船の往来を保持しようとする、いわば弁の役としての申し分のない造形に見えた。気が付けば、もう社会科見学に来た小学生のノリで、今となっては小振りな運河を喜々として観察して回り、シャッターを押しまくる自分がいた。

旧閘門の川底の位置に歩道が整備されている

端整に積み上げられたレンガと石材

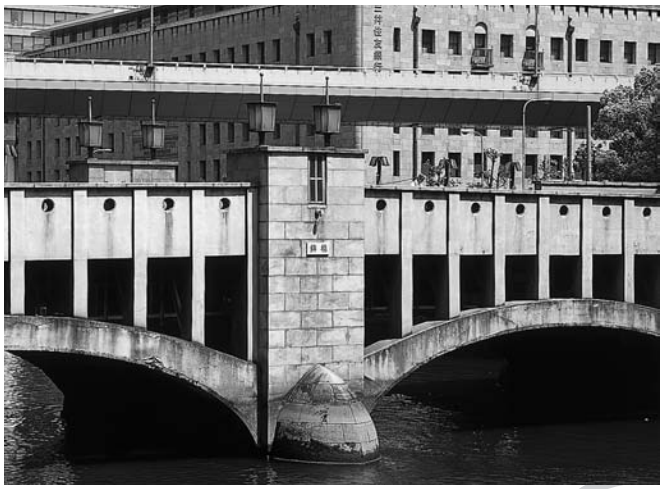
保存の仕方が素敵だ。川底に近いレベルで下を歩けるのである。船上の目線で運河を眺めてみる。端整に積まれたレンガ壁のあちこちに草が生え、過ぎ去った百年の推積を物語る。おかしな鉄輪と鉄鎖が付いている。深い所では三段構えだ。「係船環」と呼ぶ、閘門の操作で水位が安定するまで船をつな

レンガの壁には「係船環」と鉄鎖

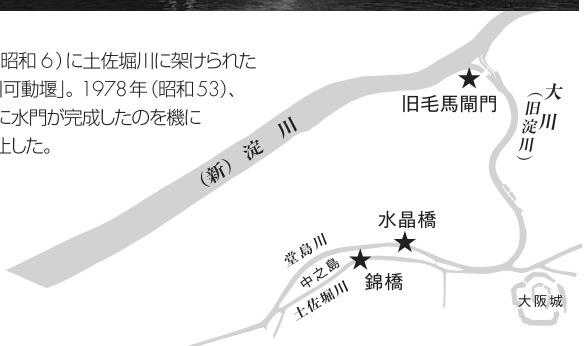
鉄扉の先端には太い木の角材が取り付けられている

レンガや石組みの構造の中にも100年の歴史の重みが感じられる

■ 水晶橋
河川浄化を目的とした「堂島川可動堰」として1929年（昭和４）につくられた。
現在は堂島川に架かる歩行者専用橋として利用されている。



■ 錦橋
1931年（昭和６）に土佐堀川に架けられた「土佐堀川可動堰」。1978年（昭和53）、東横堀川に水門が完成したのを機に稼働を休止した。



ぎ留め置く金具であった。巨大な鉄扉の先端には、大黒柱ほどに太く厚い木が付けてある。万が一、船が接触した時のクッションだろうか、土木施設ならではの気遣いのディテールに違いないと、直ちにレンズを向ける。

次には川岸から眺めてみる。２ｍ近いレンガ舗装の小道が、両脇を走っている。おそらくこれは運河の分厚い壁の上端で、同時にそれが川岸の柔らかな遊歩道と化している…。次々に現れる近代化遺産の珍しくとも美しい素顔の撮影で、あっという間に３時間あまりがたっていた。

人工的に取水口を築いたのだから、流域には当然水量の調整を果たす堰がある。大川は、中之島で堂島川と土佐堀川の２つに分かれる。やはりその両者に、橋を兼ねた開閉式の堰はあった。水晶橋と錦橋の２橋で、水都・大阪の象徴ともいうべき中之島に架かる土木建造物として、凛とした姿を見せつけている。

それにしても大阪の川辺の景色は、何故こうも美しいのだろう。橋は川面に接するほどに低く、目隠しになりがちな高い堤もない。人は水辺近くに身を置き、川全体を眺めることができる。そんな素晴らしい都市風景の礎が、遠い明治の時代に毛馬につくられていた。

旧閘門の両壁の上にはレンガ舗装の遊歩道